

やり残しの軌跡

ちば

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

灰の剣聖、リイン・シユバルツァーは英雄である——が、鈍感な甲斐性なしなのは間違いない。数多くの女性に想いを告げられた彼だが、その全てを蹴つてしまい、その結果……未だ独り身である。

クレア・リーヴェルトは全くもってどうしようもない。優秀で容姿も整っているが、幸は薄いし負のオーラが滲み出ている。しかも最近 は色々と残念だ。

これは、そんな二人が織り成すラブストーリー……ではなく、喜劇とでも言った方がいいだろうか。

帝国の呪いが解けた約半年後、生徒達の卒業を見届けたリインは、ある場所に向かうことになるのだが。

閃の軌跡IV後のアフターストーリーを殴り書いたものです。

ご興味ある方は、是非。

目次

1. クレアさん、何やってんですか

1

1. クレアさん、何やってんですか

「これからどうするんですか？」

「TMPが解体されるまではこのまま尽力して……その後のことは決めてません。ですが、何かあれば相談させて頂きますね」

「ええ。待ってますよ。この数年間を振り返ると、俺も含めてもう少し話し合っていれば——そう思うことも少なくなかったですし」

「ふふ……そうですね。大丈夫です。今度は取り返しのつかなくなる前に、ちゃんと相談しますから」

帝都に粉雪が降り注ぐ中、そう言っただけで彼女は微笑んだ。

帝国の呪いが解けた記念すべき年——その冬のことだった。

？

「リーヴェルト元少佐と懇意にされてましたよね？」

「ええまあ。というか、いきなりどうしたんです？」

アークス越しに聞こえる落ち着いた声に、凜とした表情が思い出される。カエラ少尉——いや、今は中尉だったか。

ユウナ達の卒業式が終わったのがつい先日のこと。初めて持った生徒達が巣立っていくのを見届けた俺は、一人寂しく帰省の準備を進めていた。

そんなこんなで部屋の片付けを行っていた今しがた、カエラさんからの通信が入ってきたというわけだ。

「まあ、懇意ではありますね。多分。向こうがどう思っているかはわかりませんが」

カエラさんからの珍しい通信に加えて、クレアさんの話題。さすがに不審に思ったが、とりあえずは彼女の話の続きを待とうと思い、そうだけ返しておく。嫌な予感がビンビンにしているが、あえて気にしないようにする。

お互いに色々と思わせぶりなこともあったが実際問題、あの人との関係について言及するならば……答えは、よくわからない——だ。

ユミルではいきなり抱きしめられたり、海都ではキスをされたり（頬に）。色々あったが、適度な距離感というか、お互いに積極的な方でもないし、俺達の関係は微妙な感じに収まっていた。

（というか、あの人がいなければ誰かしらを選んでた筈なんだよな、俺は……）

決戦前最後の夜——結論から言うと俺は誰も選ばなかった。何人かからお誘いは受けたが、全て断らせてもらった。今でも本当に申し訳ないと思っているが、中途半端な気持ちで接するのも違うだろう——という想いが勝ってしまった。

まあ、純粹にクレアさんを愛していてどうのこうの……とはまた違うとは言っておこう。というか、純愛だったらどんなに良かったか。

あの人に抱いている感情。それに名前をつけるとするならば、尊敬、心配、苛立ち、失望、驚愕、感謝、高揚——まあ、色々ありすぎてわけがわからない。とにかくモヤモヤする。内戦前後はともかく、最近に至っては見ていてイライラするようになっていた。なぜかはわからないが。

そんなこんなで、恋愛感情なのかそうでないかもわからないまま、悶々とした日々は続いている。そのお陰で恋人の一人も出来やしな。本当、このまま生涯独身だったら責任を取って欲しいまである。

——俺は恋愛すらまともにも出来ないのか。いや、ギリアス父さんもドライケルス時代はそうだったようだし、やはり血筋というものだろうか。

「シユバルツアーさん？ シユバルツアーさん？ 聞いてますか？」

「あ、ああ。すみません。それで、なんですっけ？」

アークス越しに少し大きな声が飛んでくる。少しぼうつとしてしまっていたようだ。

「もう……先月からリーヴェルトさんが私の部隊に協力してくれているんです。まあ、期間限定ですが」

初耳である。というか、最近帝都でも姿を見かけないと思ってた

ら、そんなことやってたのかあの入。

「なるほど。共和国の建て直しに出来る限り協力する。帝国政府の声明でありましたね」

正確にはオリヴァルト殿下の発案だったが、それを政府が代弁した形だ。人的支援も行っていくとのことだったから、多分その一環なのだろう。ちなみに俺には要請は来ていない。

というのも、散々無理してきた身のため、一応政府側としても考慮してくれたということらしい。まあ、禄に休めていなかったし正直助かった。何より、卒業までユウナ達のことも見なければいけないかつたし。

「ええ。帝国政府からの補助要員——いわゆる人的支援ですね。改めて接してみてわかりましたが、基本的には優秀な方ですよ。人当たりも良いですし、一般人からの評判もまずまずです。それに、半年前も影では色々配慮してくれていたみたいですし」

「そうですね……」

基本的には——その単語が引つかかったが、今は隅に置いておく。言っちゃなんだが悪名高き“氷の乙女”だ。針のむしろになつていないか心配だったりもする。尤も、心配だけではないが。

「思いつめて突拍子もない行動をすることもありますが、基本的には穏やかな人ですからね。ただ、受け入れられているのは驚きですが……」

「あ、あはは……なんだか辛口ですね？」

「気のせいです」

現在、俺の胸中は心配半分——怒り半分なのが実情だ。

（またあの人は勝手に決めて……いや、諦めよう。進歩がないのは俺も大概なんだから）

そう思つて心を落ち着かせる。生徒達は立派に成長を遂げているというのに、俺の自己犠牲癖はなかなか治らないし、クレアさんの自爆癖はむしろ歳を重ねる毎に悪化している。

「まあ、帝国内では有名でも共和国ではそうでもないですから。一部軍関係者からの当たりが強いところはありますが、そこはまあ私がい

ればなんとか」

なるほど。まあ、カエラさんは軍の中でも一目置かれているようにだし、この人が味方になってくれていいるなら大丈夫か。そう思い、俺は感謝の言葉を述べてから、聞いたかかったことを言葉に出す。

「……恩に着ます。ただ、今日はなんで通信を？ 世間話というわけでもなさそうですが……」

「それが……」

言いづらそうに、少し声を潜めながらカエラさんは話し始めた。

優秀で面倒見もよい。そこはまあ、流石クレアさんと言ったところだそう。ただ、少し目に余るところもあるそうで……

曰く、魔獣の群れをニコニコしながら一人で殲滅した

曰く、猟兵団を深追いした氷の乙女が血まみれで微笑んでいた。それを見たカエラさんの部隊の隊員が震えながら失禁した。

曰く、骨折しているのに治癒もしないで魔獣と戦い続けていた。カエラさんは怒ったそう。

曰く、宿舎でビール片手に泥酔しているとところが度々目撃されている。休日前は唸りながらトイレに籠っていることが多々あるそう。

などなど——俺の頭を抱えさせるには充分すぎる内容だった。ほら、頭痛がしてきたよ。

自暴自棄気味になる気持ちは分かるが、それにしてもやっていることが酷い。色々ダメな人だ。元々がお淑やかなお姉さんだけに、ギャップが凄いことになっている。

……ほんと、何やってるんだあの人。

幸いなことに致命傷を負ったことはないそうだが、やっていることは完全に危ない人のそれだ。

出会った頃の頼れるお姉さんはどこへやら。今となっては完全に問題児だ。まだミュゼやアッシュの方が手がかからないと言ってもいい。近くにいる分、何かあっても対処しやすいということもあるが。

この一年間の中で一番と言っても良いほど、俺の頭を悩ませてくれたお姉さん。

これが恋の悩みだったらどんなに幸せだっただろうか。などと思うが、現実には厳しい。

「……カエラさん。実は俺、今日からしばらく休暇なんですよ」

「え？」

これはいわば、半年前のやり残し。

ずっと心に引っかかっていたことを考えれば、これもまたよい機会だろう。

こうして俺は帰省を取りやめ、人生初のカルバード行きを決めたのだった。